

一者、コスモス、都市(三)

山内得立

二

プロチノスの一者は前述の如く超越的な存在である。否それは語の通常の意味に於て存在者ではない、それは凡ゆるものを超越するが故に存在そのものをも超越しなければならぬ。それは超越的存在者ではなく超越そのものである。それは一なる或ものでなく一そのものである。超越の概念はプロチノスの哲學に於て徹底した。その意味に於て彼は正しく超越哲學の始祖プラトンの後継者であつたのである。かくの如き徹底せる、絶對的な一者を立てた理由はしかし何處にあつたであらうか。ハイネマンはそのモチヅとして四つを數へてゐる。一、究極的にして包括的な統一を得んとする人間の要求、二、無限に多くの根據をさらに最後の一つの根據にまで押しつめてゆかうとする人間の努力、三、凡て相對的なものの外にある或ものを、即ち絶對的な或ものを擱まんとする意志、四、多くの神に満足せず一なる神に於て凡てを見出さうとする宗教的憧憬 (F. Heinemann: *Plotin, Forschungen über die*

一者、コスモス、都市

2 Plotinische Frage, Plotins Entwicklung u. sein System S. 246)。これらは凡て眞であるであらう。

それはまさしく一のもの (auto-hen) であり絶対的なる一であつた、それは部分をあつめることによつて得られた一でもなく一に參與することによつて得られるところの一でもない、それは多の統一でもなく多に於ける一でもない、それは多の外にそれらから超越した一そのものであるのである。

一元的なる要求は、かゝる一者にまで我々を導くが、根據を求める我々の努力は又こゝに一つの究極的なる原理 (archo) を、または第一原因を見出す。凡ての存在するものはこの一者に最後の根據を見出さねばならなかつた。

さうして根據としての一者は同時に働きてあり創造であり、行動でもあつた。さらに絶対者としての一者はそれが有るところのものであり、それが有らざるところのものに何の依存をも有つてゐなかつた。それは凡ての相對物の外にありそれから獨立なるが故にそれはそれ自ら充足し完全でありそれ自らの外に何ものをも必要としなかつた。善とは即ち之になづけられた名であるに外ならない。

一者はまさにかくの如き性格に於てあるが、しかしそれはそれ故に存在ではなくむしろ一つの非存在と考へらるべきでなからうか。プロチノスも明かに之を非存在 (*μη ον*, *Ennead. VI. 9. 5*) (*οὐκ ον*, *V. 2. 1*) と云つてゐる。そしてそれは無であるが故に形相もなく形態もなく無規定であり、無限定でなければならぬ。

しかしそれ故に一者は何ものでもなく何處にも存在しないのであらうか。凡ゆる事物をば勿論、存在そのものをさへも超越する一者は抽象的なる或ものとしか言へず空虚なる無であるしかないではなからうか。プロチノスの一者が決してかくの如きものでないことはそれが存在でなく存在の根據であり凡ゆる存在がそこから發出するものであるこ

とによつても明らか得られるであらう、それは空虚なる無でなく却つて全き或ものであり充されたる或ものである。それはむしろそれ自らに充足するものであるが故に自らから外へ溢出せざるを得ぬものであつた。超越とは他から超出することであるが超越の徹底せるものはさらに自己自らからも超越しなければならぬ。自己を超越することは即ち自己から溢出することに外ならない。さうして漲溢するものは自らに充實せるものでなければならぬが故に超越性の原理は決して一者の貧困にではなく却つてその充實に於てあるといはねばならない。

一者はそれ故にその徹底的なる超越の故に外に溢出することを本質とする。Emanatioとは即ちこの原理を示すものに外ならなかつた。さうしてプロチノスに於てはこの原理によつて一者が多の世界と交渉し、神は現世と交關することを得るのである。

しかしこの交關を論ずる前に果してプロチノスに於てエマナチオが説かれてゐたかどうかを研究しなければならぬ。なぜならプロチノスにはこの原理はなかつたと論ずる人さへもあるからである。例へばミュラーはそのプロチノス研究第一に於て次の如く論じてゐる (Miller: Plotinische Studien I. Hermes Bd. 48)。プロチノスの哲學にエマナチオの原理があり、彼はこれによつて一者とその他の世界、即ち叡智、精神、物質の世界との交關を説明しようとしたといふことは殆んど通説となつてゐるが、それは誤つてゐる。一者がそれ自ら何であるかについては我々は何事もいへない、たゞそれが我々にとつて如何にあるかを明かにし得るにすぎない。しかし一者は如何にして我々にとつて或ものであり得るであらうか。假令それがそれ自らから出て我々に向つて現はれるとしても一者が一者であるのは凡ゆる存在と運動と経過との中であつて依然として一者であつて、その他の何ものでもないところにあるといはねばなら

ない。根據の根據はそれ自らに於てあつて他に於てあるものではない。それは他のものからまたは他に對してあるのではなく専らそれ自らに於てそれ自らの爲にそれ自らに對してあるものである。一者はたとへ物質の世界に光を投げかけそこに影をつくるとしても光は光として光の中にあつて決して物質の中にあるのではない。その動きは決して外へではなく内へである。プロチノスの立場はどこまでも内在的であつて他出的ではない。一者は超越的であり永遠的であるが故に生滅も變化も分裂もしない筈である。——ミュラーの第一の説はそれ故に一者がどこまでもそれ自らの中に封鎖せられたものであつて決してその外に溢れ出ることができない、外へ出たと思つてもそれは依然として一者そのものの中にあるのである、世界は一者の外に又はそれ以前に何ものもあり得ないからであるといふことになる。第二にプロチノスの説はミュラーによれば決して *Emanatio* ではなくむしろ *Effluentia* である。この二つは決して同一ではない。前者は恰も池中に投げられたる石が波紋を描いて周邊に及ぶ如きものをいふのである。世界は一者の外にない故に一者が他に及ぼす影響は一者が自らに描く波紋であるに外ならない。しかるにエマナチオは一者を源泉としてそこから他の世界に流出することを意味するのである。凡てが一者の外に出で得ないプロチノスの立場にとつてはエマナチオは成立しない、たゞ自らが自らの世界に於てその影を落としその形を波及するにすぎない。さらに第三に一者はそれ自ら一なるものであつて決して多であることができない、一者が流れ出て多となるのではなく一者はいくら自己を外にしても多となることができない。否一者は如何なる仕方にも自己を外にして他となることができなない。多の世界は後に明かになるやうに人間の實踐 (*Praxis*) と觀照 (*Theoria*) によつて作り出されたものである。恰も日光はそれ自らとしては我々の眼に見へないが、分光器によつて七色に分析せられる如きものである。このとき

分光器は丁度ブラクシスとテオリアとの役目をなしてゐる。それらによつて一なるものが多に分解せられるのであつて分解せられたる色はそれぞれに獨立なる色ではなく依然として一つの日光であると一般であらう。一者はかくの如く時と場合とによつて種々なる多様にあらはれるが、それにも拘はらずそれは一者であり自己そのものであつて決して他ではなく況や多であることができない。エマナチオとは一者から何ものが流出し又は分散することを意味するが故にプロチノスではエマナチオが説かれる筈はないのである。——以上の論據からしてミュラーはプロチノスの哲學に於て Emanationslehre のあることを嚴しく拒斥するのである。

なるほど以上のミュラーの論說には一應の根據があるであらう。しかしその理由からエマナチオの思想がプロチノスの哲學と全く相容れないものであるといふべきであらうか。勿論この問題はエマナチオといふ概念の規定によつて異ならざるを得ないのであるが、私はこの問題についてミュラーに對し直接に立向はないで抑、エマナチオとは如何なる思想であり哲學史上如何なる位置を占めてゐるかを明かにすることからして始めよう。

私の見るところではエマナチオの思想はそれ自らとしては膚淺であり時としては單なる比喩にすぎぬとさへ思はしめるものがあるが、人間の思想の發展の上からは實に興味深き一つの立場を表示してゐるのである。それはプラトン、アリストテレスのギリシア思想からクリスト教の立場に移るべき一つの過渡的なるものを現はしてゐる點に於て殊に我々にとつて興味深いのである。この點を少しく詳述しよう。Pythagorasといふことはアリストテレスの哲學の根本思想をなしてゐる、彼にとつて存在はたゞそこに存在するものでなく發展するものであつた、それは可能より現實へたえず發展しそこに一つの生成 (genesis) を作るものであつた。さうしてこの生成の根據をなすものが即ちデュナミス

であるに外ならなかつた。デュナミスはそれ故に單に一つの可能的なる状態を意味するものでなくまさに一つの力をあらはし發展を藏するものであると考へられねばならない。

プラトンに於ても *dynamis* の考へがなかつたのではない。プラトンの存在はイデアでありそれは生滅變化を超えた永遠にして一般的なる世界であり、或意味に於て靜的なる世界であるが、しかし晩年のプラトンには存在を單にかかる靜的なるものと見ないで一種の動的なる力として考へたことは大に注目するに足る事柄であるであらう。それは殊に「ソピイスト」に於て現はれたる思想である。プラトンのイデア論は初期の會話篇からして殊にメノン等に於て構想せられ、ポリテイアに於て完成せられたのであるが、このイデア論は「パルメニデス」に於て嚴しく批判せられ吟味せられた。プラトンはそこに於て自己のイデア説を反省してそれに纏はる種々なる困難を大膽に指摘したのである。さうしてこの嚴正なる批判を通して現はれたものが「ソピイスト」に於ける存在論であつた。そこでは眞に存在するものはや靜的なるイデアはなく、動的なる存在である、それは一種の *dynamis* であつた。それはもはや單なる存在でなく存在と共に非存在をふくむものであつた。單なる靜ではなく靜と共に動を併有する世界であつた。ただ同一の世界でなく同一と共に異他をふくむ世界であつた。一言にしてはそれは *koinonia* の世界であつたのである。それは明かに一種の *genesis* の世界であるがしかしプラトンのゲネシスはアリストテレスのそれとは全く異つたものであつた。それは生成といはるゝよりもむしろ形成と譯せらるべきものであつて決してアリストテレスと同一なる立場に於て考へられたものでない。形成とはいはゞ藝術家の作用であり *Demiourgos* の働きである。それは自ら生れ成るものにあらずして自ら形づくり成すところの世界である、プラトンの哲學は實にこの點に於てアリストテレスと全

7
く異つた立場に立つてゐるのである。しかしギリシア哲學はプラトンからアリストテレスに進んだやうに形成から生成の立場に移らねばならなかつた。生成の概念はアリストテレスに於て極まつたといはねばならぬであらう。この意味に於てもアリストテレスはギリシア思想の完成者であつた。

しかるにキリスト教の根本思想は「創造」にある。それは一つの或ものから他のものが、原因から結果が生成するのではなく、何ものもないところから或ものが創めて造られるのである。形成が藝術家の操作であるとするならば創造は神の働きである。前者には尙何ものかが——マテリアとかアイデアとかと與へられてゐるが、神にとつては何ものも與へられてゐない、神の前には何ものも存在せず神以前に何ものも存在し得ない、凡ては神によつて、神からして神を通して新しく生れ出づるのである。創造の思想はまことに神についてののみ正しく語られ得るものであり、それを除いては無意味でなければならぬ。創造は無から創造であつて原因からの發展ではない。因果關係を明かにするものが學問であり就中科學であるとするならば創造を啓示するものは宗教であるといはねばならない。ギリシア思想とクリスト教とはこの點に於ても明かに峻別せられねばならぬのである。

さうしてこの二つの思想の間に立つものが——ギリシア思想からクリスト教の立場に移る過渡をなすものが即ちプロチノスのエマナチオの思想であつた。それはプロチノスがプラトンの學派の人であり（新プラトン學派の驍將であり）同時にアウグスティヌスの前驅者であるといふ歴史的事實によつてのみでなく、思想史的にも彼のエマナチオは生成と創造との間にある思想として特色づけられ得るのである。何故ならば、エマナチオは一方にとにかく或一つの根源からの發展である以上はギリシア的なる生成の思想に近いであらう。凡ては一者から流出し或は一者から分散する

のであるからしてである。しかしそれと同時にエマナチオは決して原因から結果が生成することと同一ではない。一者はそれ自らとして見るべからざるものであり把握し難いものであり、それはそれ自らに於て存在を超越し、存在するとも云へぬものであるからして殆んど無に等しい、否無であり非存在である。かゝる一者から流出するものは殆ど無からの流出であると云はれねばならぬであらう。無からの流出は原因なきものを原因とすることであり、それは單なる因果關係ではあり得ない。アリストテレスには尙第一原因、または第一存在といふものがあつた。彼にとつては存在はこれから發展しそれから生成したのである。しかるにプロチノスにとつて一者は凡てのものの根源であることに於てアリストテレスと軌を一にするが、この根源者は實は存在でないものであり一種の非存在でなければならなかつた。のみならず一者から流出したのも我々にとつて不可視であり不可識である。恰も日光がそれ自らとしては色をもたないのみでなく、そのものとしては存在を把握せしめ得ないのと同様であるであらう。光がそこにあるといふのは光が何ものかに當つて之を照し出す限りに於てである。日光が分光器によつて初めて七色に分解せられそこに色ありと視られ得るのであるが、光そのものとしては直接に感覺せられ難い、光はギリシア人の考へたやうに視らるべきものに非ずしてむしろ視ることを可能にするものである。それは視らるべきものでなくしてそれによつて他のものを見るところのものである。光が客體的であるよりもむしろ主體的側で置かれるのも此の理由によるのであらう。それと同じくプロチノスのエマナチオはそれによつて他のものが存在せしめられてもそれ自らは所謂存在ではない、一者が自ら流出する姿は我々にとつて不可視であるといはねばならない。たゞそれが外界に於て或は物質に當つてそこに落すところの痕跡を我々が見得るにすぎない。時は永遠の影なりと云はれるのもこの意味であらう。永遠とは一者

の世界であり、それが物質の上に自己の影をおとしたものが即ち時間であるに外ならない。さうして日光が七色に分たれるのは分光器の働きであるやうに一者が多の世界に分たれるにはそこに何らかの力が働かねばならない、この或ものが即ち *theoria* であつた。テオリアはそれ故にプロチノスの哲學に於てはエマナチオと相並んだ一つの重要な思想である。否それはエマナチオをして單なる生成たらしめないでこれを創造の世界にまで齎らすところの契機であるといはねばならない。しかしテオリアとは何であるか。

三

テオリアとは先づ見ることを意味する。*theoria* とは觀照することである。Theater は見らるべきもの即ち芝居を意味するのである。しかしそれは單に肉體的なる眼をもつて感覺的に見ることではない。むしろ心の眼をもつて觀することである。ギリシアでは *theōō* とは神の心を見る人、特にデルポイに於て神託を受くべく遣はされた人々を意味してゐた。それは事物を見るものでなく神の旨を見る人でなければならぬ。肉眼によつてもものを見るのではなく心の眼をもつて神を見るものでなければならなかつた。テオリアのギリシアの意味は略々以上の如くであるが、それはプロチノスによつて如何に解釋せられ使用せられたか、エイネアデンの第三卷八節に彼はテオリアを定義して次の如く言つてゐる。*ei theōōi tois kai ēi alio theōōi ēsti tois, ēsti au' alios theōōi*……「フイエイの譯によれば、
Puisque l'le produit en demeurant immobile en elle-même et qu'elle est une raison, elle est une contemplation
つまり、フイエイの譯によれば Wenn es bleibend schafft und in sich selbst bleibend und Begriff ist, so möchte

es wohl Schauen sein となつて略同様の意義をあらはしてゐると見てよからう。テオリアとはプロチノスにとつては自己の中に止つてしかも何ものかを作り (troze—schaffen) そしてそれが一つのロコスであるときにそれとして云はれ得るのである。但しこの場合自己の中に止るとは何を意味するかが問題であり、さらに自己の中に止つて何ものかを創造することが主であるか或はたゞ自己の中に止つてゐることのみが中心であるかと問題であらう。先づそれは例へばプラクシスから區別されて後者が自己から外へ出て働くのであるに對してあくまでも自己の中に止ることがテオリアであると考へ得るであらう。アルヌーなどの解釋は大體そのやうである (René Arnou: *poétique et théologie, Etude de détail sur le vocabulaire et la pensée du Eneide de Plotin*)。またプロチノス自身の言によつて見てもテオリアの特色としてそれ自らの中に止ることが重ねて論ぜられてあることに注意せられねばならぬであらう。しかし自己の中に止るとは何を意味するのであるか。それはたゞその中に止つて靜止することではなく、却つてそれに於て作ることを意味しなければならぬ。テオリアとは一つのポイエシスである。プラクシスも一つのポイエシスではあるがしかしそれは外なるものへ出て (effusio ad exteriora) 何ものかを作るのであるに對しテオリアの制作は自己が自己自らに於て制作することである、自己が制作することに於て他を要しないもの、即ち制作の作用に於て完全なるものである。作ることには於て他を要するものは尙不完全であるであらう、完全なるものは自己の外に他を要しないものでなければならぬ。テオリアが自己の内に止るのはそれが自己を自己自らに作ることに於て不足なきものである。テオリアの制作はそれ故に完全に於てそれ自らなる作用でなければならぬ。しかしテオリアのかくの如き作用は果して何を意味するのであるか。それはプラクシスが一者から多者へ、超越的なるものから經驗的なるものへの發展

であるに對し逆に多者から一者へ、經驗的なるものから超越的なるものへの歸還を意味するのである。テオリアがそこに働くといふのは雜多に於て統一を措定することである。觀照とはたゞ眺め見ることではなくそれによつて根源的なるものを、超越的なるものを端的に把握することである。テオリアがやがてテオリイ（理論）となるのもこの故であつた。理論とは現象の雜多の方面にはなくその統一なる面に於て成立するものであるからである。

しかし一なるもの多なるものへの開展と多なるもの一なるものに歸入することとは畢竟するに別々の働きではない。プラクシスはテオリアの反面でありテオリアはプラクシスの逆の方面であるにすぎない。さうしてこの意味の二つの働きが働くところにプロチノスのエマナチオの特色があつた。それは一種のゲネシスであり開展であり制作であるが、しかし未だ決して創造ではない。凡てが一者から發展する點に於てゲネシスがあり、或意味に於て原因がそこに働いてゐるといはねばならぬであらう。エマナチオは一者からの開展であつて一者の創造ではないからである。しかしそれと同時にエマナチオはプラクシスとして一種の創作でありテオリアとしても制作であるといはねばならぬであらう。多様な世界が一者から開展するのは一種の創作によるのである。しかしこの創作は未だ神の創造にまでは到らぬであらう。神の創造は無からのクレアチオであり、そこには何らの原因も理由もあり得ないからである。クリスト敎の創造が神を原因とするならば、何故にこの世界に惡があり偽があり不完全があるかは理解せられ得ぬであらう。神は善であり眞であり完全でなければならぬからである。クリスト敎に於て惡の起源の問題、殊に神の正義の問題（Theodicee）は神を萬物の原因と考へるところからして起るのである、然るにクリスト敎にとつては神は被造物の原因ではなく、被造物は神から生成したものでなく神によつて創造されたものである。神を原因とするならばその結果

なる現世に於て何故に悪があり、偽があるかは不可解であらう。しかるに萬物は神の結果ではなく、神によつて創造せられたものである。さうして神の意志は絶対であつて我々の忖度を許さぬものである。現世に何故に悪があるかは神の意志によつて定められたものであり、神の意志は絶対であつて凡慮の量り知るを得ぬものなのである。

プロチノスにとつてはしかるに萬物は一者から流出したものであつて神によつて作られたものではなかつた。この意味に於て彼はプラトンの忠實なる弟子であつたのである。しかし彼がプラトンから異つてゐる點は、一者が萬物に光被するのは一種の創作によつてであり、プラクシスもテオリアも共にポイエシスであると考へたところにあるといはねばならぬ。プロチノスの哲學は恰も彼が時代的にギリシアとローマとの間に生れたやうにプラトンの哲學からクリスト敎の哲學に移るべき過渡に位してゐるのである、エマナチオの説は正しくこの思想をあらはしたものであつた。それはミュラーの論する如く一面どこまでも内的たるを失はぬであらう、一者がいくら外へ出てても要するに一者の中にあり、外へ溢れ出ることは要するに内に歸ることであるとも考へ得られるであらう。その點からミュラーのいふ如くエマナチオは彼に於て成立しないと考へ得るかもしれない。しかし一者が溢出することはたとゞ自己が展開するのみでなく多の世界を創り出すことではなければならぬ。一者はそこに於て一つの創作をなすのである。一者は單に一者であるに止らず同時に多の世界でなければならぬ。この交渉面は決して一者からの自然的なる展開によつては説明し得られないのである。一なるものが何故に多となるか、一からは決して多なるものは生れ出てこない。それは一者の實踐によつて始めて可能であり、或はテオリアによつて理解せられ得るものなのである。さうしてプラクシスとは一つの創作であるに外ならなかつた。一は何故に多であり得るかそれは一者の實踐によつてゞあり創作によつてである。

恰も色なき光が分光器によつて色ある多の世界となり得ることと同様である。エマナチオの思想にはこのプラクシス、とテオリアとがあり、それによつて一者はたとひ自己内に止らず自己を出て多の世界にあらはれることができるのである。故にプロチノスの哲學はミューラーのいふ如くたゞ一者の内に止るものでない、一者は自己を出て他の世界にあらはれなければならない。このことが即ちエマナチオであるとするならばプロチノスの哲學はやはりエマナチオの説をもつてゐるといはねばならぬであらう。それは單に一者の展開 (extensio, explicatio) ではなく一者の流出 (Emanatio) でなければならぬ。それはたとひ池中に投ぜられたる石が周邊に波紋を描く如きものではなく、池を出で、陸地に光被するものでなければならぬ。プロチノスにとつてはたとひ一者の世界があるのではなく、他者の世界が與へられてゐるのである。他者の世界とはしかし何であるか、それは即ち物質である。

物質とはプロチノスにとつて與へられた世界である。クリスト教の神にとつてはそこに與へられたる何ものもない、凡ては神によつて創造せられ神の前には何ものも既存し得ないのである。プロチノスがクリスト教の思想と異なる點も主としてここにあるであらう。しかし彼にとつて物質とは何であつたか。それを明かにするために我々は物質の思想を先づギリシア哲學に於て顧みなければならぬであらう。

プラトンのマテリアは萬物がそれに於て存在しそれによつて連続し或は分離するところの一つの *συνολογία* であつた、それは空虚なるものであり受容的なるものであり、それ以外の何ものでもなかつた。それは一般に性質なく分量なく力さへもつてゐなかつた。質料はそれ自らに見られ得ざるものであり、これを見んとするものから逸れるがそれを見ないときに却つて現はれるところのものであつた。この點に於てプロチノスのマテリアもプラトンに負ふところ多大

であるといはれねばならぬであらう。彼のマテリアも亦一種の無である、一者が充實の故に無であるとするればマテリアは空虚なるが故に無と考へられるものである。前者が光であり却つてその故にその姿の不可視であるに對しマテリアは全くの暗黒であり、光なき無である。この二つは同じく無であるが本質に於ては相反してゐるのである。マテリアは光の盡くるところに現はれる闇の如きものではない、それは光に對して始めからそこに存在する暗黒であるのである。一者はこのマテリアに衝突してそこに自己の姿を現はす、いはゞマテリアは一者の影を宿すべき質料であるに外ならぬのである。或はそれは一者そのものの受容的なる映寫面であるともいへるであらう。

アリストテレスのマテリアは一種の力である。それは可能性であり、*dynamis*であり潜勢力である。それはそれらの發展によつて現實になり得るものである。従つてマテリアは彼にとつて現實と連續してゐるのである。しかるにプロチノスにとつてはマテリアは一者と連續してはゐない、一者は光の原理であるに對してマテリアは闇の世界である。それらは互に斷絶し隔絶せられてゐる。しかしそれ故にマテリアは一者に對して反對の原理であるとはいへない、マテリアが全く空虚であり無力であるとするならばそれが一者に反抗するだけの力は何處から出るであらうか。反抗とは假令消極的であるにせよ尙一つの力でなければならぬからである。この意味に於てマテリアもそれ自らに獨立な世界ではないであらう。或意味に於てマテリアも亦一者の中にあるとさへ言はねばならぬであらう。しかしそれにも拘らずマテリアは一者の世界と同一ではないのである。ポイムカーはプロチノスのマテリアをプラトンとアリストテレスとから引き出さうとしてゐるが (Bäumker: *Problem der Materie in der griechische Philosophie*.) プロチノスに於て我々の確かむべきことはむしろそれらからの區別であり、それらとは異つた特色であるといはねばならない。

それはそれ自ら空虚であり無力である點に於てプラトンのものであるが、それが一者を除いて意味をもたぬことに於てプラトンとは異つてゐる。プラトンのマテリアはイデアにとつて他者であるがプロチノスのそれは一者にとつて他のものではない。それは一者に對してあるものでもなく一者に抗して力あるものでもない。この點に於てそれはプラトンのマテリアからも明別せられねばならぬであらう。しかしそれと同時にプロチノスのマテリアはアリストテレスとも異つてゐる。アリストテレスのマテリアは現實への一つの段階であり或意味に於て現實と同様であるがプロチノスのそれは一者と全く異つたものである。マテリアは決して一者からは發展しない、また一者はマテリアから生成したものではないのである。しからはプロチノスのマテリアが此等からは區別せられてその特色を發揮するのは何處に於てであるか。キリスト教にとつてはマテリアは惡の原理であつた、それは單に存在に對する非存在の原理であるのみでなく道徳的に又は宗教的に惡の原理であつた。キリスト教が物質を罪惡と見るのは原理的なるものに屬してゐるのである。惡は勿論善に反對したものでありこの二つは互に相容れないものであるが、しかしこの對立は存在論的なるものではなく道徳的なるものである。プロチノスの哲學に於て實踐的なるものが重要な位置を占めてゐることは我々の既に見た點である。プラクシスはテオリアと共に一つの創造的なるものをあらはしてゐた。それは單なる存在の流出では説明し得ぬものでなければならぬ。流出の過程に於て創造が働くことはそこに一つの新しき世界を現出することである。マテリアはこの世界の現出にとつて基體的なるものを供するのである。しかもこの基體的なるものは單なる存在ではない。實踐によつて開かれたる世界はまだ實踐的なるものに於て基礎づけられねばならぬ。それは光に對する闇であると同時に善に對する惡でなければならぬ。善が善として自己の姿をあらはすのは惡に於てであつた。罪

惡の自覺に於て直ちにあらはるゝものが佛性であるべきであるからである。善によつて惡があると同時に善も亦惡に於てそれ自らを體現し得るのである。イングはその「プロチンの哲學」(Inge: Philosophy of Plotin)に於て神が先きであるかマテリアが先きであるかを問題としてゐるが、我々にとつてはこの二つは決して先後の問題となるべきものでないと思ふ。クリスト教にとつては神は凡てであり、凡ては神によつて創造せられたものであるから神の前にマテリアのあらゆる筈はない、それがプロチノスに於て問題となるのは彼が未だクリスト教的なる立場にまで達してゐないことを證するものであらう。イングが之を彼について問ふたのは明かにクリスト教の思想に立つてプロチンを問題としたのである。しかしプロチノスにとつては一者は決してマテリアを創つたのではない、またマテリアは一者に發展すべきポテンツでもない。一者はマテリアに於て自己を表現するのみである。こゝからしてクリスト教的なる創造の立場に到るには尙何程かの距離を残してゐるのである。言ひかへればプロチノスはプラトンからクリスト教に到るべき過渡段階にあつた。こゝでも我々が上にのべたことは同様に眞であるといはるべきであらう。リッターは略これと同様なる見解からして、プロチノスの哲學をギリシア哲學からクリスト教思想への過渡に於て規定せんとしてゐる(C. Ritter: Über die Emanationslehre in Ubergang aus der altertümliche in die christliche Denkweise 1847)。

さうしてこのことは單に思想内容上のみでなく歴史的なる位置に於てもまたまさに言はるべき事に屬するのである。我々は以上によつてプロチノスの根本思想と思はれるものを略敘述し終つた。さうしてそれからして我々の學び得たことは彼の思想が種々なる點に於てプラトンからキリスト教的なる立場への移渡をあらはしてゐるといふことである。彼は普通に新プラトン學派の主將といはれるのであるが、それは決してプラトンの單なる再興を意味するもので

はないであらう。彼がヨーロッパの思想史に於て一つの新しき世界を構築したといはれるのはやがて中世紀を通して長くヨーロッパを支配した神の國の思想である。それはアウグスチヌスに於て説かれたものであるがこの構想の基本的なるものは既にプロチノスの一者に於て豫構せられてゐたのである。それは都市的なる國家でもなく、世界國家でもなくまさに神の國でなければならなかつた。この國の特色は徹底せる超越性と絶對性にある。この國はそれぞれなる都市に結びついた國家でもなく、また世界を到る處に故郷とするコスモポリスでもない。その一般性は個々の都市に附着したものでなく、また個々の都市から抽象せられたものでもなく、純粹にそれ自ら一つの全き國家であつた。それはそれ自らに於て存在する一般性であり、個別によつてまたは個別からして得られた一般性ではない。それはそれ自らにあつて何ものにも依存しないのである。個別的なるものは却つてこれに依存するのであつて決してその逆ではない。歴史的にいへばローマ法王はローマの一都市にあるが決してローマに束縛せられることなく却つて凡ての國家の上に立つてゐたのである。カイザルのものがカイザルに歸へされ、神のものが神にかへされたる後に始めて立てられたる一つの國である。都市國家から世界國家へ、世界國家から神の國へ進展するのがヨーロッパの歴史の推移であつた。そしてこの第三の國家を地上に建設した最初の人はプロチノスであつたのである。プロチノスは新プラトン派であるといはれるが以上の如く理解されるときはプラトンのポリス的な立場とプロチノスのテオポリス的な思想とは直ちに同一視せられ得ぬことが分明となるであらう。歴史的には都市からコスモスへ、コスモスから一者に發展したのであるが、國家の理念からは神はコスモスの上に立ちコスモスは都市の前にあるといはねばならない。